

レポートの評価とデータの科学

矢島 敬二

経営学部の学生に「現代技術論」という講義を担当しているがその一コマとして全日本空輸の担当者が編集し市販された『事故のモンタージュ』というシリーズを使って2件の航空機事故の顛末を紹介した。その後『航空機事故の教えること』をまとめてメールで送れという課題を出したところ通常の出席者数よりかなり多い124通のメールを受け取った。予想外というべきことに作文の内容はきわめてよいのであった。誤字は極めて少ない。まことに情報技術の時代であった。メールを読んでいるうちに評価について実験をしてみようと考えた。講義する側と講義を聞く側のレポート評価は合致するのかと疑問に思ったのである。すべてのレポートに目を通すと間に合わないので学籍番号から系統的に16の報告を選び出し、これらを詳しく読んで8つの文例(文例A、...、文例H)を選び全文を読んで評価をしてもらうことにした。1つの文例は800字ということになっているのでA3版で裏表、つまりA4で4ページの文例集を配布し、学生側の評価をまとめてから、講義担当者の評価を配布し比較してもらう段取りである。

学生による文例の評価は第1位の文例と第2位の文例を選び別々にカードに書いてもらった。講義側の評価は「独自の考察があるか」、「説明項目数は適切か」、など6個の項目を設定し、各項目5点満点で採点した。採点結果は30点満点で平均23.8点、最高が29点、最低が17点となった。この最低点の文例は講義のノートで「独自の考察がない」という採点者の見解が学生側の見解と食い違うだろうと予想された。90分の持ち時間で選出にどれくらい時間がかかるかと心配であったが、意外にも1位、2位の選択操作は予想外に早く、いったいほんとうに読んでいるのかと思われるほどであった。「俺のが出てる」などという小さい声も聞こえたりして、選択は10分強で終了した。斜め読みになれている感じである。あらかじめ各文例には見出しをつけたが、つけない方がよかったという気もした。文例を読む時間を減らそうと考えたからであるが、問題は残った。また文例の配列順序も問題でどうしても最初の文例から読むはずで、文芸賞の選択とは趣を異にし、記載順

目次

・巻頭言「レポートの評価とデータの科学」.....矢島 敬二	1
・役員改選結果報告	2
・運営委員会記録	2
・幹事会記録	3
・研究報告会記録	3
・シンポジウム記録	6
・IFCS(国際分類学会連合)関連	7
・関連学会活動	7
・日本学術会議報告	7
・国際会議開催情報	9
・事務局から	9

序も十分考えておかないといけないなどと反省しながら結果を待った。

さて108人の出席者からの評価を勘定した結果、第1位についての得点はA=18、B=5、C=18、D=15、E=13、F=18、G=7、H=13 計107点となった。いっぽう評価が終わってから配布した講義担当者の評価はA=26、B=19、C=27、D=29、E=17、F=23、G=21、H=20で、まとめとして「大変よい」がA、C、D、Fであり、「よい」はB、E、G、Hであり、両者の順序はよく一致したようで、一致しなかった場合にと用意していた説明は不要となった。実際の文例と講義担当者の評価、得点とを比較し今後の参考にすると目出度く講義を締めたのであるが問題はいろいろある。まず第2位に指名され文例の得点はA=10、B=10、C=14、D=20、E=14、F=14、G=9、H=17 計108であり、第1位の文例得点と第2位の文例得点とは性質が少し違っているようにみえた。評価の次元が変わるのではないかという気もする。解釈を複雑にするような質問はしないほうがよいのか、複雑になるにせよ補助情報は取るのがよいのか結論はもっていない。いろいろな対象を評価するさいにどういう注意をすべきか、どのように採点を設定すべきかなどについての指針のすべてを「データの科学」に求めるのは無理であろうが、少なくとも「データの科学」が基礎的な知識を提供することを望みたいのである。

(日本分類学会、会長;東京理科大学)

役員改選結果報告

会則に従い、平成15・16年度の役員改選を行った。2名の選挙管理委員（大塚純正、昭和大学歯科病院；山岡和枝、国立保健医療科学院）により開票を行った。結果は以下の通りである。なお、任期は、平成15年4月1日から平成17年3月31日である。

会長

矢島 敬二（東京理科大学）

会計監事

高倉 節子（長崎純心大学）

村田 磨理子（統計情報研究開発センター）

運営委員（五十音順）

今泉 忠（多摩大学）、上田 尚一（龍谷大学）、
大津 起夫（大学入試センター）、大橋 靖雄（東京大学）、
後藤 昌司（大阪大学）、佐藤 美佳（筑波大学）、
佐藤 義治（北海道大学）、清水 信夫（統計数理研究所）、
白旗 慎吾（大阪大学）、鈴木 督久（日経リサーチ）、
丹後 俊郎（国立保健医療科学院）、林 篤裕（大学入試センター）、
松田 芳郎（東京国際大学）、水田 正弘（北海道大学）、
宮原 英夫（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）、
村上 征勝（統計数理研究所）、村田 磨理子（統計情報研究開発センター）、
矢島 敬二（東京理科大学）、山岡 和枝（国立保健医療科学院）、
吉野 諒三（統計数理研究所）、吉村 宰（大学入試センター）

また、運営委員会によって、以下の幹事会メンバーが承認された。

幹事長

林 篤裕（大学入試センター）

幹 事

林 文（東洋英和女学院大学）

幹 事（庶務担当）

吉村 宰（大学入試センター）

幹 事（広報担当）

清水 信夫（統計数理研究所）

運営委員会記録

平成13・14年度第8回運営委員会

日 時：平成15年2月25日

場 所：電子メールによる

出席者（回答者）：大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、杉山 明子、高倉 節子、田中 豊、土屋 隆裕、土井 聖陽、林 篤裕、林 文、水田 正弘、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二

次の議題について、賛成14名で承認された。

議題：

ISMシンポジウム「インターネット調査の現状を検証する - 調査法としての評価方法と標準化をどう考えるか -」（2003年3月25日、26日、於：統計数理研究所・講堂、主催：統計数理研究所、協賛：（社）日本マーケティング・リサーチ協会、日本行動計量学会、日本分類学会）の協賛団体となることについて

平成13・14年第9回運営委員会

日 時：平成15年3月9日

場 所：電子メールによる

出席者（回答者）：大隅 昇、岡太 彬訓、後藤 昌司、杉山 明子、高倉 節子、垂水 共之、土屋 隆裕、土井 聖陽、林 篤裕、林 文、水田 正弘、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、吉野 諒三

下記の議題について承認が得られた。

議題

1. 日本分類学会役員改選について

(a) 会長候補の推薦

15名より会長候補の推薦があり、矢島敬二氏（東京理科大学）を会長候補とすることとした。

(b) 選挙管理委員の承認

幹事長・幹事会より、大塚純正（昭和大学歯科病院）・山岡和枝（国立保健医療科学院）の両氏を推薦し、15名の承認を得た。

(c) 会計監事候補の連絡

幹事長・幹事会より、高倉 節子（長崎純心大学）・村田磨理子（統計情報研究開発センター）の両氏を候補とすることとした。

2. 研究報告会について

第19回日本分類学会研究報告会（2003年3月28日に開催）について、諸般の事情により会場を当初予定していた統計数理研究所から多摩大学ルネ

ッサンスセンターに変更することを連絡した。

平成15・16年第1回運営委員会

日 時：平成15年6月26日

場 所：電子メールによる

出席者(回答者)：今泉 忠、上田 尚一、大津起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、佐藤 義治、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、丹後 俊郎、林 篤裕、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、山岡 和枝、吉野 諒三、吉村 宰

上記20名から回答があり、下記の議題について過半数の了承が得られた。

議題

1. ISMシンポジウム「環境科学と統計科学の新たな融合」(2003年9月10日、26日、於：統計数理研究所・講堂、主催：統計数理研究所、共催：(社)環境科学会)への協賛について
2. 統計関連学会連合大会(2003年9月2日～5日、於：名城大学天白キャンパス(名古屋市天白区)、主催：応用統計学会・日本計量生物学会・日本統計学会、協賛：日本行動計量学会・日本計算機統計学会)への協賛について

平成15・16年第2回運営委員会

日 時：平成15年11月19日

場 所：電子メールによる

出席者(回答者)：上田 尚一、大津 起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、林 篤裕、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、吉野 諒三、吉村 宰

上記16名から回答があり、下記の議題について過半数の了承が得られた。

議題

1. 旅費の支給について
2. 電子メールアドレス収集について
3. 統計関連学会連絡委員会への対応について
 - (a) 統計関連の学会間の行事の調整や相互の情報提供を行う
 - (b) 国内外の連絡調整窓口として機能する
 - (c) 連絡委員会のWebを立ち上げ、連絡事項の提示を行うただし、Webの運営には経費が発生するので、その一部を負担する必要がある。
4. 2004年の連合大会への協賛について

幹事会記録

平成13・14年度幹事会報告

各運営委員会、総会前の会議および随時電子メール、電話等により打ち合わせを行った。

1. 平成13・14年度運営委員会開催
2. 平成14年度年次計画
 - (a) 総会およびシンポジウム開催
 - (b) 研究報告会開催
3. 平成13年度会計監査
4. 統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について
5. 会報発行
6. 平成15・16年度役員選挙

平成15・16年度幹事会報告

各運営委員会、総会前の会議および随時電子メール、電話等により打ち合わせを行った。

1. 平成15・16年度運営委員会開催
2. 平成15年度年次計画
 - (a) 総会およびシンポジウム開催
 - (b) 研究報告会開催
3. 平成14年度会計監査
4. 統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について
5. 会報発行

国際学術情報流通基盤整備事業についての検討

平成15年7月2日に日本教育会館で開催された「国際学術情報流通基盤整備事業(SPARC/JAPAN)説明会」に、日本分類学会からは清水広報担当幹事が参加した。資料として参画提案書及び種々の説明パンフレットなどが配布された。

SPARC/JAPANへの参加は現状では困難と考えられるが、日本の学術情報の国際化・電子化を進めるこれらの事業については今後とも関心を払い、動向を随時把握する必要があると思われる。

研究報告会記録

第19回研究報告会

日 時：2003年3月28日(金)10:00～17:00

会 場：多摩大学ルネッサンスセンター

参加者：34名

スロベニアよりVasja Vehovar(University of Ljubljana)氏を招待し特別講演をお願いした。また8件の一般発表があり、活発かつ有意義な討論が行われた。

特別講演

Measuring social network on the Web

Vasja Vehovar, Valentina Hlebec and Katja Lozar Manfreda (Faculty of Social Sciences, University of Ljubljana, Slovenia)

Much of the contemporary social research is oriented towards the social impact the Internet has on the life of the citizens. In particular, researchers are often discussing, whether the Internet is improving or harming the participation of social relationships. The proposed paper also contributes to this topic as it addresses the ego-centered social networks of the Internet users.

The ego-centered social networks of intensive Internet users were measured within a national RIS Web survey (RIS - Research on Internet in Slovenia, <http://www.ris.org>). There, the respondents were randomly split into four groups. Each group received a name generator for one type of the social support provision: instrumental, informational, emotional support or social companionship. Each respondent also received a set of specific questions related to each person (alter) they named. Around 250 respondents answered the Web questionnaire for each type of social support provision. The data allow to estimate the size and the structure of ego-centered networks of intensive Internet users. Analysis shows that the network size differs significantly from the general population, however no major differences are found in network composition and structure. The variations across different types of social support provision are also negligible. However, the comparison of the two sub-networks, e.g. the Internet sub-network (alters with whom respondents communicate via the Internet) and the traditional sub-network (alters with whom respondents communicate only via traditional means of communication) shows several variations. The composition of the Internet sub-networks is focused on friends, whereas in the traditional sub-networks the kin is dominated. On the other side, the two sub-networks do not differ in multiplexity of ties, closeness and importance of alters, but they do differ in the average number of years alters are known to respondents and also in the geographical distance (the Internet sub-networks comprise of alters less long known and with higher percentage of alters living far away). The Internet thus fosters the social networks that are somewhat less traditional: more friends, more geographically distance, and more recent relationships.

一般講演

段落抽象化によるテキストの自動図解化

石塚 隆男 (亜細亜大学)

本研究は、自然語で書かれた文章における各段落の内容を自動抽象化することにより見出しを生成し、その結果を用いて自動図解化することを目的とする。

具体的には、文章から名詞 (句) を抽出し、語彙リストを作成した。各単語の重みつき頻度を計算し、「最高頻度の語句 + key term」により見出しを構成した。単語の頻度は、段落内だけでなく、文章全体の出現を考慮したTF・IDFや割引頻度により修正を行った。新聞の社説記事を対象に見出しの自動作成並びに図解化を行い、本方法が簡便法でありながら有用であることが確認された。

ある自由回答についての分析 - アフターコーディングによる方法とWordMinerによる方法との比較検討 -

高倉 節子 (長崎純心大学大学院)、村田磨理子 (統計情報研究開発センター)

「女性の自立意識調査」の中の「Q22 あなたは男女が籍などにこだわらず、共に生活していくことについて、どう思いますか。」という設問に対する自由回答について、旧来のアフターコーディングによる方法と、自由回答の分析ソフトWordMinerを用いての解析と2つの方法により分析を行い、これによる結果を比較検討した。旧来の方法では、叙述の概略の傾向、これと属性項目等との関連は見られるが恣意性が混入することは否めず、WordMinerによる場合は、用いた語彙の分類による位置付けから自由回答文の構造的な分析結果が得られるが、大綱を把握することは困難でもあり、これら2つの方法は補足的であると考えられた。

男女大学生サンプルのストレス・疲労関連語

土井 聖陽 (大阪樟蔭女子大学短期大学部)

男子大学生をサンプルにして、慢性的な疲労感やストレスを対象として自由回答と3種類の項目尺度を併用して測定した。得られた質的・量的データは、テキスト型データ解析ソフトのWordMinerを用いて分析され、自由回答から疲労感、フラストレーション、攻撃性の関連語を分類した。さらに、自由回答と項目反応の不整合が検討された。



臨地実習における学習達成の自己評価と指導者総評の分析

須永 恭子（金沢大学医学部）、保田 明夫（（株）平和情報センター）

臨地実習における学生の学習状況の把握と今後の指導への示唆を得ることを目的とし、自由記述による学生実習自己評価および実習施設指導者総評のクラスター化による比較分析を行った。結果からは実習形態の相違による特徴的習得内容と未習得内容、指導者の主な指導内容と実習の成果を把握した。そして以上の結果の考察から実習前・中・後での重点的・補足的指導、実習指導者との実習目標の確認および実習方法の検討が本実習の学びの充実を図るために必要であることを本研究の知見として得た。



ファセット・アプローチにもとづく調査票設計とデータ解析 - 「日本語観国際センサスの調査」の事例 -

真鍋 一史（関西学院大学社会学部）

この論文の問題関心は方法的なものである。「日本語観国際センサス調査」を事例として取りあげ、ファセット・デザインにもとづく調査票設計の具体的なプロセスについて解説し、その意義について考察するとともに、ファセット・セオリーから導かれる理論的諸仮説のファセット・アナリシスの技法を用いたデータ解析のいくつかの試みとその結果について紹介する。このような試みをとおしてファセット・アプローチの有効性を検証する。



組織図便覧に希望すること

矢島 敬二（東京理科大学経営学部）

経営体における組織構造の現状を数量的、実証的に検討するために『組織図・事業所便覧』（ダイヤモンド社）は有用である。同書は上場2400社の組織図、事業所の情報を収め、特定の事業体がどのような組織形態をとればよいかを検討するのに必要な計数を提供する。しかし、同書では事業部、部の下位にあたる課を組織図に収める会社は6割弱で部以上の組織単位を分析しなければならないのは編集方針の欠陥である。



微少形状特徴によるテクスチャ画像の触感印象の分類

田村 仁（東京理科大学経営学部）

人間の視覚能力では、あるテクスチャ画像を一瞥するだけでそこに撮像された対象物の素材感を認識

し、対象物の手触りまで推測できることがある。本研究では、自然なテクスチャ画像に含まれる微小な大きさの形状特徴が、このような視覚情報だけから得られる触感印象に影響を与えているものと仮定し、テクスチャ画像から微小形状特徴を抽出するフィルタを実現した。サンプル画像に対して人間の視覚が受ける印象を調査し、その結果とフィルタによって抽出した特徴量を関係付ける重回帰式を得た。

株価の投機行動分析

近藤 明良（拓殖大学）

以前から株の投機に興味を持っていました。しかし薄給のため手を出すことが出来ず、時期を完全に失し現在に至りました。今それを机上だけで計算を試みて満足したいと思っています。

シンポジウム記録

第19回シンポジウム

データの科学と統計教育

～情報をよむ手法としての統計学～

日 時：2003年12月19日（金）13：30～16：15

会 場：統計数理研究所

出席者：会員22名、非会員21名

プログラム

- (0) シンポジウムの開催主旨と総論
矢島 敬二（東京理科大学）
- (1) 統計教育の現状と課題
～生涯教育としての統計リテラシーの必要性～
渡辺 美智子（東洋大学）
- (2) 統計情報データベースの現状と課題
宿久 洋（鹿児島大学）
- (3) 統計教育用ソフトの要件
上田 尚一（龍谷大学）
- (4) 総合討論
会場参加者との質疑応答

特別講演

統計教育の現状と課題

～生涯教育としての統計リテラシーの必要性～

渡辺 美智子（東洋大学）

情報公開が一般化しつつある電子社会において、統計的ものの見方や統計数値に関する知識の必要性はますます高まっている。このような要求に対し、どのような取り組みが現在行われているのか、またそこでの課題について紹介する。また、最近の情報技術が統計教育の形態そのものを大きく変えようと

しているが、その点についてもいくつかの事例を紹介しながら考察する。

統計情報データベースの現状と課題

宿久 洋（鹿児島大学）

近年の計算機環境、ネットワーク環境の発達に伴い、統計科学に関わるデータが様々な場所で公開されている。ここでいうデータは、いわゆる統計数値データにみではなく、統計科学に関する教材、論文リスト、リンク集、その他様々な資源をさしている。

本報告では、我々の研究グループが統計科学の普及のために取り組んできたいくつかのデータ公開に関するプロジェクトを紹介し、その延長として、現在、個人や団体がそれぞれ個別に構築している統計科学に関するデータベースの統合について提案する。



統計教育用ソフトの要件

上田 尚一（龍谷大学）

統計教育は種々の問題に当面して、改善を必要視されている。この問題には、(a) 誰が、誰に、どんな内容を教えるか (b) どんな方法で、どんなツールを使って教えるか、など多くの側面が関連しているが、ここでは、まず (a) のうち「どんな内容を教えるか」を「情報をよむための手法」という観点から考えた上、(b) に関して、「統計教育用ソフト」を活用するために期待すべき点を例示する。

IFCS（国際分類学会連合）関連

IFCS-2004のお知らせ

さきにお送りしたIFCS Newsletter No.25やリーフレットに掲載のとおり、IFCS-2004は、米国シカゴにおいて、2004年7月15日から18日に開催されます。JCSからも多くの参加を期待します。おもなスケジュールを再掲しますので、ご確認の上、お申し込みください。IFCS-2004の最新の情報は、<http://www.classification-society.org/ifcs04/>に掲載されています。

なお、リーフレットに残部がありますので、必要な方は、事務局までご連絡ください。

IFCS Travel Award Programについて

米国シカゴで開催されるIFCS-2004においても、Travel Award Program (TAP) の設置が予定されており、現在大会事務局で最終の準備を行っているようです。応募書類がまだ学会事務局に届いておりませんので、詳細は不明ですが、前回と同様であれば、若手研究者用の賞として、35才程度までの研究者にIFCS-2004大会参加の旅費補助を行う賞となるはずですが、公募してから締め切りまでの時間が短いので、事前に会報でお知らせしておきます。なお、詳細が判明すれば学会Webページで告知することにいたします（2004年1月を予定）。

関連学会活動

【統計関連学会連絡委員会】

統計関連学会連合についてはこれまでお知らせしている通り、日本分類学会も何らかの協力を行う方針です。連絡委員会（平成15年3月29日、6月7日、9月5日、10月18日に開催）には、矢島会長と林幹事長の少なくともどちらか一方が参加しております。審議の内容については、今後連絡委員会で立ち上げ予定のWebページに掲載されるものと思われま

すので、そちらを参照して下さい。

【その他】

各学会の活動状況は、ホームページをご覧ください。

日本統計学会

<http://www.jss.gr.jp/>

応用統計学会

<http://www.applstat.gr.jp/>

日本計算機統計学会

<http://www.jscs.or.jp/>

日本行動計量学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/>

日本計量生物学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/>

日本学術会議報告

統計学研究連絡委員会（統計研連）第18代委員長吉村功先生から2003年6月に、第19代委員長柳川堯先生から10月にそれぞれお寄せいただいた報告をそのまま掲載いたします（両先生とも日本学術会議第4部会員です）。文中の所属や肩書きなどは当時のものです。

（1）2003年6月18日付記事（吉村功委員長）

1. 学術会議総会

第18期最後の総会が2003年6月2～5日に開かれました。7月下旬には、第19期が発足します。統計学研究連絡委員会の新しい世話担当会員は、柳川堯（九州大学）教授の予定です。第19期は任期（3年）の途中で中断され新しい体制になる予定で、すでに制度変更のための法律整備が進んでいます。

学術会議は、学者の国会といわれるように、学・協会等、学問の研究者組織とされているところから推薦された人を、総理大臣が（特別公務員である）学術会議会員に任命します。学術研究者は、その職務を、研究者の見識を政府の政策に反映させ、政策に指針を与えたり、研究者間の学術的交流を進めたり、外国の類似組織への対応窓口を用意するものと考えてきたと思います。

「総合科学技術会議」は（政府決定として）学術会議の果たすべき機能を、政策提言機能、科学に関する連絡調整、社会とのコミュニケーション機能、であるとしています。改革は、現在の制度がこの機能の展開に適当でないという政府の判断、学術会議運営審議会の判断等によっているようです。細部の決定はこれから1年半の間になされるでしょうけど、任期6年（3年ごとの半数改選）、70歳定年、

co-optation制度（教授会が補充する教授を選考するようなやり方）研連の廃止、等が予想されています。

現会長は、外国に対し「日本の科学者コミュニティ」として機能させたいということを再三にわたって発言していますので、一般学者からの代表推薦というより、権威ある学術会議が学問的業績を認定し、その眼鏡にかなった人を集団に構成員として選びたい、ということのようです。改革は「成果を挙げた偉い人（scholars of distinctive merit）の集まり」としての学者集団という色彩が強くなりそうです。

2. 統計学研究連絡委員会

今期、統計学研究連絡委員会は、科研費審査員候補の推薦といったルーティンワークの他に、統計学関連学会の協調という目的を追求してきましたが、結果として成果を上げるに至りませんでした。これはひとえに小生の能力の故であり、小生が2期でやめることを決意したのもそのためです。退任に当たり、関連学会の期待に応えられなかったことをお詫びいたします。

以上

（2）2003年10月23日付記事（柳川堯委員長）

吉村功第18期会員の後任として第19期日本学術会議会員に選ばれました。重責に身が引き締まる思いです。吉村前会員の方針を引き継ぎ、学会との密な連携を目指して日本学術会議の報告を逐次行って行きたいと思っています。よろしく願いいたします。

7月22日～24日に第140回総会（19期第1回総会）が開催されました。会長、役員、各種委員会委員の選出が主な議題でした。2期以上にわたって会員を続けておられる方が過半数以上おられることに驚きました。総会や部会は、それら常連の方々のイニシアチブの下で進行し、すべての初体験がそうであるように目を白黒にしている間に終了しました。新会長は、黒川清会員（第7部：東海大学総合医学研究所教授）、新副会長は戒能道厚会員（第2部：早稲田大学法学部教授、名古屋大学名誉教授）、岸輝夫会員（第5部：物質・独立行政法人材料研究機構理事長）が選出されました。また、統計学が所属する第4部の部長は、郷信広会員（日本原子力研究所特別研究員、京都大学名誉教授）が選出されました。現在19期の活動方針と活動計画が検討されています。以下、私どもに関連ある統計学研究連絡委員会（以下、統研連と略記）とその周辺の報告です。

1. 統研連の委員について

統研連は、日本統計学会、行動計量学会、応用統

計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本数学会統計数学分科会の6学会から選出された委員、および日本学術会議の7つの部の各部から推薦された日本学術会議会員から構成されています。他の研連とは異なって、日本学術会議の各部から会員1名が加わっているのが特徴です。統計学の学際性が考慮されています。18期までは、統研の定員は14名でした。しかし、すでに吉村前会員から報告されたように「課題別研究連絡委員会」発足のため第19期では定員が1名削減されました。このため、日本統計学会には委員を2名から1名に減少していただき、他の5学会には、従来どおり1名をお願いすることにいたしました。研連の委員は、10月下旬ごろに正式任命の見込みです。

2. 研連の将来について

吉村前会員の報告ですすでにご存知のように、日本学術会議は新体制に向けて大改革されます。その大枠は第18期の改革推進委員会の議論を経てすでに決まっており、すでに来年4月の国会上程を目指して、法改正に向けた作業が関連省庁で進行中とのことです。新体制の日本学術会議では、従来の「研究連絡委員会」は消滅し、代わって時限的に設定される「課題別委員会」が構築されます。したがって19期の統研連は最後の統研連となり、任期も短縮される見込みです。「課題別委員会」の「課題」は学問「分野」により構築することもできるし、また「新たな課題」ごとに組織することもできると言われています。第19期統研連の重要な役割は、統計学関連学協会と密接な連携を保ち続けることができ、かつ時代の要請を反映した「課題」を冠した統計学関連の「課題別委員会」をいかにして構築するかについて英知を傾注することにあるのではないかと推察されます。

なお、新体制での日本学術会議は、現行の7部制を「人文社会系」「生物生命系」「理工系」の3部へ、現行2370名の研連委員と同数の「連携会員」を設け「課題別委員会」に配属する。また、日本学術会議会員は、「選考委員会」を設置し30名程度の委員を委嘱、「選考委員会」が現行と同数の210名を選考する方向で法制化されるようです。法案は大枠だけで、細かなところは新しい学術会議で決定の方針と言われていますが、学協会・学問領域から距離をおき、浮いてしまった「科学アカデミー」となる可能性が強く心配されています。そうならないように19期日本学術会議の動向を、特に厳しい目で見ていく必要があるのではないのでしょうか。

国際会議開催情報

ISIのWebサイトに最新の国際会議情報が掲載されています。詳しくは、
<http://www.cbs.nl/isi/calendar.htm>
を参照ください。

March 9-11, 2004, the University of Dortmund,
Dortmund, Germany
The 28th Annual Conference of the “Gesellschaft für
Klassifikation” (GfKl)
<http://www.statistik.uni-dortmund.de/GfKl2004/>
GfKl2004@statistik.uni-dortmund.de

事務局から

研究報告会のお知らせ

先にご案内をお送りしたとおり、第20回研究報告会は、平成16年3月23日に開催を予定しています。プログラム等の詳細は、ホームページに順次掲載していきます。

日本分類学会ホームページ

ホームページのURLは、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>です。研究会の予定などの掲載情報を広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。

報告集の頒布

シンポジウム、研究報告会の報告集は若干の在庫がありますので、ご入用の方は事務局までお問い合わせください。

会報へ寄稿のお願い

今号に寄稿いただいた皆様には、紙面を借りて、お礼申し上げます。お忙しいところ、ありがとうございました。発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

JCS会報では、常時、会員の皆様の寄稿をお願いしております。国内外の学会に参加した際の印象記や研究会の予定など、会員に知らせたいことなど広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。電子メールでの寄稿を歓迎します。

会費納入のお願い

会費収入が見込みを下回る年度が続いております。納入へのご協力をお願いいたします。ご不明の点は、学会事務局までお問い合わせください。

IFCS論文集について

IFCS-93、IFCS-96、IFCS-98、IFCS-2000、IFCS-2002大会の論文集が発刊されておりますので、ご関心のある方は出版社までお問い合わせください。

New Approaches in Classification and Data Analysis
(1994)
(Proceedings for the IFCS-93, Paris, 1992.)

Data Science, Classification and Related Methods
(1998)
(Proceedings for the IFCS-96, Kobe, 1996.)

Advances in Data Science and Classification (1998)
(Proceedings for the IFCS-98, Rome, 1998.)

Data Analysis, Classification and Related Methods
(2000)
(Proceedings for the IFCS-2000, Namur, 2000.)

Classification, Clustering, and Data Analysis: Recent
Advances and Applications (2002)
(Proceedings for the IFCS-2002, Cracow, 2002.)

なお、いずれの巻もSpringer-Verlagから出版されております。現時点での価格等につきましては、下記宛にお問い合わせください。

〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-13
Springer-Verlag Tokyo (シュプリンガー・フェアラーク東京) 編集企画部まで
E-mail: kambara@svt-ebs.co.jp

< 学会問い合わせ先 >

日本分類学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所気付

学会事務担当：林なおみ (毎週月曜のみ)

TEL: 03-5421-8741

FAX: 03-5421-8796 (日本分類学会宛を明記のこと)

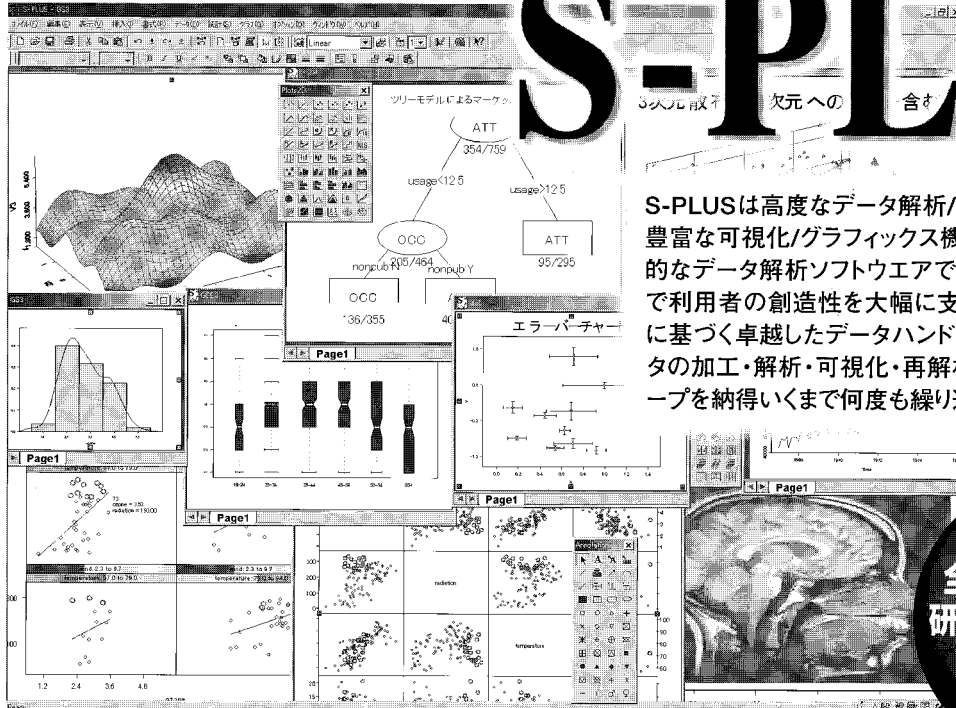
E-mail: hayashi@rd.dnc.ac.jp (林篤裕、幹事長)

nobuo@ism.ac.jp (清水信夫、広報担当幹事)

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>

創造あふれる研究開発のための 汎用データ解析ソフトウェア

S-PLUS



S-PLUSは高度なデータ解析/データマイニング機能と豊富な可視化/グラフィックス機能の両方を備えた本格的なデータ解析ソフトウェアです。素早い明快な処理で利用者の創造性を大幅に支援し、オブジェクト指向に基づく卓越したデータハンドリング能力により、データの加工・解析・可視化・再解析というフィードバックループを納得いくまで何度も繰り返すことができます。

全国の著名企業・
研究機関・大学での
豊富な実績を
誇ります

主な特長

- 4000以上の高度で最新の解析機能。
(基本数学演算、行列演算、基本統計、探索的データ解析、線形代数、多変量解析、各種回帰分析、各種クラスター分析、分散分析/検定、一般化線形/加法モデル、時系列解析、シミュレーション、OR、ニューラルネット、TREEモデル他)
- 100種類以上のカスタマイズ自在な高品質のグラフィックス機能。出力形式も多彩。
- オブジェクト指向のS言語による本格的なプログラミング/データ加工機能。OLEやODBCなど入出力インターフェース機能も充実。
- 常設のトレーニングコースや、強力なサポートでソリューションを側面支援します。数理科学の専門スタッフが個別問題のコンサルティングにもお応えします。

特定分野ソリューションのためのアドオンモジュール

- S+WAVELETS (ウェーブレット解析)
- S+DOX (実験計画法、品質工学、RSM)
- S+NUOPT (数理計画法、非線形最適化)
- S+GARCH (GARCHモデル)
- S+SpatialStats (空間統計)

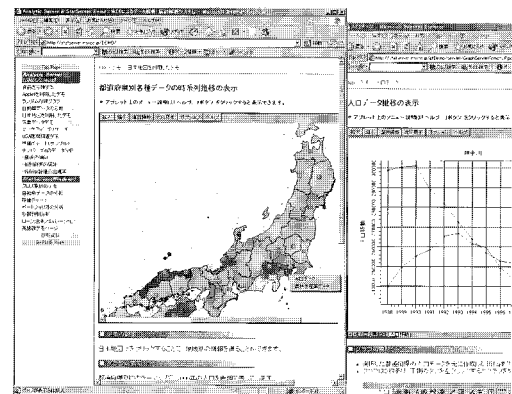
対応OS : Windows (2000, ME, NT, Xp) / 主要UNIX / Linux

※S-PLUSはInsightful Corp.が開発ライセンスしています。
※会社名および商品名は各社の商標または登録商標です。

- ◆S-PLUS無料紹介セミナー定期実施中!
当社新宿セミナールームにて、一人一台のPCを用いてS-PLUSをご説明させていただきます。お気軽にお申込みください。
- ◆S-PLUSトライアル版無償提供中! お気軽にお申し付けください。
- ◆PDF形式のマニュアルが当社ホームページよりダウンロード可能です。

StatServer

StatServerはS-PLUSの豊富な機能をWEBから利用可能にするサーバソフトです。WEBを使った解析情報サービス、簡易な研究成果公開/教育システムなどを、高度な解析手法と高品質なグラフ出力とともに広く一般に提供することができます。



StatServerによるデータ解析サーバ実現例

S-PLUSおよびArcViewのお問合せ先

株式会社 数理システム S-PLUSグループ
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-4-3 フォーシーズンビル10F
TEL 03-3358-6681 FAX 03-3358-1727
e-mail: splus-info@msi.co.jp
(URL) <http://www.msi.co.jp/splus/>

S-PLUSホームページ <http://www.msi.co.jp/splus/>